

## V61c すばる望遠鏡の観測支援と運用について

能丸淳一 (国立天文台ハワイ観測所)

すばる望遠鏡の運用の基軸となるスタッフは、昼間のメンテや観測準備を担当するデイクルー、夜間に観測操作を行うオペレータ、観測者をサポートし、観測全体をリードするサポートサイエンティストである。スタッフの構成、勤務体制、業務内容、そして全体のマネージメントなどが、以下で述べるすばるの運用上の特徴により、どのように実現されているかについて発表する。

望遠鏡運用の観点から見ると、すばるはこれまでの日本の望遠鏡にはない、以下のような特徴がある。(1) 海外に望遠鏡と運用組織の主体がある、(2) スタッフの常駐する施設から望遠鏡までの距離が約 60km も離れている、(3) 望遠鏡が標高 4200m という、ある条件下では生命にとって危険な場所に位置する、(4) 事務職員を含め約 60 名が携わる大規模プロジェクトである。この結果、日常の運用が日本語と英語を交えて行われることになる。またスタッフのローテーションによる運用が必須となるが、これにはスタッフ間の情報の確実な受け渡しが不可欠である。

このような状況に対処していくため、ハワイ観測所ではコンピュータネットワークを活用した情報システムの試みを始めた。画像データに限らず、望遠鏡や観測装置のステータスやコマンドログ、オペレータや観測者が記録した観測野帳、あるいはオンラインマニュアル、さらにはローテーションの割り当て表などを必要な人が必要な時にどこにいても見られるようなシステムである。また、望遠鏡・観測装置の各グループの作業予定と作業内容を一元的に収集し管理するオペレーションセンターを立ち上げた。このほか、夜間でも各機器に最も詳しい者が山麓から電話でサポートする体制を立ち上げた。長期的には、遠隔地からの観測、観測支援、メンテナンスを目指し、上記の情報システムはいわゆる「観測所データベース」として、観測所の様々な業務とリンクした形で運用されることになる。